

プラグマティズムの形而上学

—C・S・パースを中心に—

石田 正人 (ハワイ大学)

1. 概要

現代のアメリカ哲学では、「形而上学的である」というと「根拠のない独断的な主張」といった否定的な含みが強いが、パースからデューイに至るまでの古典的なプラグマティズムには、自由かつ大胆な形而上学的思考が認められ、科学哲学の発展と歩みを共にしつつも、壮大な世界観を表明するに至っている。とりわけパースが、分析哲学の黎明期に構想する形而上学は、(1) 論理学史からみればごく自然な展開を示しているだけでなく、(2) 近代ヨーロッパの哲学との概念的連続性を維持している。そこで、(1) に関しては、初期パースが一八六七年に発表した「新しいカテゴリー表について」を中心に論点を整理し、(2) については、一八九八年のハーバード講演に含まれる「黒板の比喻」の考察を通じて、パースの伝統思想との対決、とくにパースが考えるヘーゲルとの関係に光を当ててみたい。またその過程で、ジェイムズ、デューイ、ホワイトヘッドなどの考え方にも言及することで、アメリカ哲学全体の動きを適宜参照し、古典的プラグマティズムの取り組んだ課題が、現代分析哲学へ如何に継承されているかを最後に紹介して、レクチャーを締め括りたいと考えている。

2. 「新しいカテゴリー表について」の形而上学

この初期の記念碑的な論考で、パースはすでに個性的な形而上学的考察を展開しているが、多くの研究者はそれを見逃しているようである。その原因は、論理学史のなかでこの作品を見る視点が希薄だからである。パースのいう「新しい」カテゴリーとは、カントの悟性概念に対して「新しい」という意味であるが、思考の形成過程を導く範疇的な概念的要素を求めるという意味では、パースはヘーゲルも念頭に置いている。それは「新しいカテゴリー表について」の準備を含む最初期の草稿類から知ることができる。他方、論理学史の観点からみると、初期のパースでさえ、すでにカントとヘーゲルより遥かに現代に近いところに立っている。最も重要な点は、パースがこの時点で論理学の対象を「判断」から「命題」へと移行させていることである。私たちは、同一の命題的内容に対して、違った心理的関わりをすることが出来るが、現代の意味における「論理学」は、個々の心のありかたには左右されない、形式的構造の安定性を確保した上で機能する。たとえば三段論法を行う過程で、推論者が嬉しくても悲しくても、推論内容や論理定項は同一性を保つ。したがって判断作用の多様な「主体」を問う必要はなく、「誰が考えても同じ」ということが「命題」のレベルで帰結するようになる。パースの「新しいカテゴリー表」は、前述のようにカントを意識したものではあるが、「判断力」を含む主体の「認識諸能力」の立ち入った検討が見られないのは、そのためであるといってよい。「悟性のカテゴリー」といった範疇の特権的「帰属先」も消滅し、パースの「カテゴリー」は「認識主体」という「こちら側」ではなく「世界」のなかで機能する「普遍」となる。古くは「魂の能力」にまで及ぶ「認識能力」から論理形式としての「普遍」が切り離

されることが、現代論理学への重要な一歩であることは論をまたない。「判断」が問題にならない以上、ヘーゲルとの距離も明白となる。「新しいカテゴリー表について」は、ごく短い論考ながら、パースが自らの最も重要な作品と考えたものである。信頼性の高い邦訳は出版されていないので、別途掲載の英文テキストを参考にして頂きたい（取り上げるのは§ 1～§ 4と、§ 15の最初の三分の一だけで、あとは飛ばして差し支えない）。

3. 「黒板の比喩」におけるヘーゲルとの接点

パースの形而上学のさらに興味深い一面を示すのが、後の一八九八年に使われる「黒板の比喩」である。宇宙論という文脈のなかに置かれているために、パース独特のコスモロジーという側面が目立つが、その説明を正確に追うと、ヘーゲルにおける「即自」と「対自」の「統一」が、やさしい例を通じて考察されていることが分かる。但し、この時期のパースがヘーゲルを読んでいたことは、未出版草稿を見て始めてははっきりする事柄であり、比喩に込められた意味も、周辺草稿を参照しなければ、分かりづらいところがある。比喩のあらまはは、以下の如くである。＜黒板に、白いチョークで線を引くと、黒という「質」と白という「質」のコントラストが生じる。虫眼鏡か何かで白い線の最中央部に注目すると、それは黒への関わりを含意しない「即自的」な白であると見做しうるが、外側あるいは縁の近くの「黒との対比における白」は、その白からすれば「対自的」な白である。どちらの白も、同じ一本のチョークの線に属する「白」であるから、前者の非関係的な「白」と後者の（黒との対比を含意する）関係的な「白」が、「白」という「質」自身の力によって「統一」されている。＞ この最後の部分は、パースの形而上学の繊細な性格をよく捉えている。というのも、質的多様は「質」の働きそのものによって「統一」を得るのであり、それ以外の「統一」作用は、最終的にはこの微弱な質的統一に帰着する、とパースは考える。パースの説明のたどたどしさもあって、この「黒板の比喩」も、知られている程には理解されていないようであるが、ヘーゲルを含む近代ヨーロッパの思想との連続性を保ちながら、現代の分析哲学にもつながる興味深い思索の素材を提供するので、参加者と共にその解釈の深化をはかりたい。なおパースの議論の全体的文脈は、伊藤邦武訳『連続性の哲学』（岩波文庫 2001年）の第六章から知ることができ、黒板の比喩の部分のテキストに関しては、資料として部分訳を別途掲載するので参考にして頂きたい。

《その他の参考資料》

石田正人（2001）。「パースの量化論理について」（『科学哲学』34-2：59-74）。

———（2006）。「パースとヘーゲル」（『大航海』60：39-47）。

———（2008）。「C・S・パースとモデル論的論理学の初期局面」（『科学哲学』41-1：29-44）。